

書評

竹田聴洲著

祖先崇拜

——民俗と歴史——

内田智雄

本書の構成は、前編の「家と祖先崇拜との構造連関」と、中篇の「歴史に表われた祖先崇拜の諸形態」と、後編の「仏教思想の日本化と祖先崇拜」とからの三編からなっており、そしてそれは、著者が序章の「問題の意義」において述べているように、前編においては「先ず日本の社会における現実の祖先崇拜の実態の中にその全体的な構造と本質をさぐり」、中篇においては「そうした構造の露頭を過去の歴史について点検し」、後編においては「それらの結果に立脚して、日本の祖先崇拜と仏教とがどういふ論理によって互に融合しているか、いかえれば日本でのみ両者の結合が可能であったその根拠が何であるかをたずねる」ということばによって、本書の構成と目的とはもつとも簡明に説明されているということができよう。

私は、もともと日本の家族制度やその祖先崇拜について深い知識をもつものではないが、中国の家族制度や祖先崇拜との対

照において、夙に若干の学問的な興味と関心とを有していたのみならず、私自身が、村落の家庭生活や村落生活自体の中に、単に過去の遺俗として簡単には葬り去り得ない多くの問題の存していることを、身をもって体験しているので、著者から本書の恵与を得たのを機会に、ふるさとへの郷愁にも似た感懐をこめて、この書を一読することができたわけである。

前編の「家と祖先崇拜との構造連関」は、常民性と村落、家と同族結合、同族祭祀、祖先の靈魂、家と稻と火の五章からなっている。そして著者はまず最初に、われわれ日本人のいわゆる常民性は、都市生活においては複雑な歪曲と変形とをうけているが、村落生活においては、その古来の原型的な生活要素が簡明な姿において見出し得、従って祖先崇拜の如きとりわけ常民的なもの考察は、おのずから現在各地の村落生活の実態に向けなければならぬとして、本書の資料すなわち著者が本書に引証する実態調査の報告が、ほとんど村落に限定せられていることをことわっている。それが「常民性と村落」と題する第一章である。そして次に著者は、そうした村落における同族の祖先祭祀の実態の報告にさきだつて、祖先崇拜の座としての「家」と同族結合との不可分な関係を述べているが、それが第二章であつて、それは家族と家、家の永続性と祖先崇拜、同族結合、系譜、の四節からなっている。すなわちこの章は、「家」の性格を明らかにするためには、どうしても同族結合を視野の中にとりいれなければならないことを明らかにせんとしたものである。そしてかかる意味での同族結合は、世俗的な各種の協

同機能とともに、何よりもまず一つの祭団を構成して、それはまた家そのものと不可分な一身同体的な関係をもって、家の祖先崇拜とか祖先信仰の性格を明らかにするためには、どうしても同族祭祀の検討が必要となってくるのであって、ここに「同族祭祀」が第三章として設けられた理由と意義とがあるのである。しかしながらこの同族祭祀は、地域的にはある種の共通性をもちながらも、同族ごとに種々な個別的な差異をもっており、全体として極めて複雑な様相を呈しているけれども著者はその共通的な基本的な視点として、同族神の諸形態、同族祭団の諸形態、同族祭祀の本質と祖先崇拜、同族祭祀の基本的性格の四項を、四節に分けて考察している。

かくてかかる同族祭祀の考察は、当然に「祖先の靈魂」の問題を問題として提起しなければならない。そしてそれが第四章であるが、ここで著者はこの問題を、両墓制と年忌打切り制（両墓制とは著者によれば、埋葬した土の上に墓を建てるとともに、別の非埋葬地に墓を建てて弔祭の場とする墓制である）と説明する。祖霊の鎮地としての山、正月と盆の祖霊来訪の三節によって説明している。著者によればこの正月と盆との祭祖行事は、本来は仏教説話や年始の行事とは関係なく、神祭りの方式として一定の関連性をもつものだという、すなわちそれが初春と初秋との満月の日を中心として行われるのは、村氏神の祭季が春と秋とであることと偶然の一致ではないとするのである。然らばかかる祭祖行事の行われる春と秋とは、一体如何なる時期であろうか。それを説明せんとするのが第

五章の「家と稻と火」である。稻作農業の主体であり、そしてそれはいうまでもなく日本古来の生産経済の基本であって、それは当然に一定の農耕神の存在を前提とするものであり、火は家族の日常生活が家の火処、すなわちいろり（囲炉裏）やかまど（竈）を中心にとなまれるところから、火を神聖視する觀念が生じ、そしてそれは必然に家族生活を介して「家」と結びつき、荒神信仰として具象化されるわけである。他方また農民の祖先は、農作豊稔を加護し保証してくれるとする農民の必然的な信仰と、および山をもって祖霊の鎮まるところとする日本の原始信仰と、農耕神が本来山ノ神であるとする信仰とが相よって、祖先を農耕神と合体せしめ、やがて火や火神をもって象徴される彼等の「家」に、この両者を結びつけ、また合体せしめる契機があるとするのである。著者はこれをやや具体的に次のように説明している。農耕神すなわち山ノ神が、山から下って田の神となつて里に下る春と、その神が田から上って山に帰る秋の終りとが、本来の農耕神の祭祀の時期であったわけであるが、この農耕神に上記のような意味で家の祖先が合体して、本来同一のものであるとする考え方が生じ、この祖先と合体した農耕神が、また、火を囲んでいとなまれる家、すなわちその火神の信仰と結びついて、その核心は祖先信仰であると目される氏神祭に、農耕神の祭儀を吸収するようになったと説明するのである。そして著者はこの章の最後に、このようなことを行われたのは、祖先自体の無限定性によるものであるが、同時にそれはまた、日本の祖先崇拜に極めて広い幅と複雑な形と

を与えた原因でもあると述べている。

中編は「歴史に表われた祖先崇拜の諸形態」と題されている。著者は前編において民俗遺習の分析を通じて、日本常民の祖先崇拜が、家（同族）を基盤とする立体構造をもっていること、そういうものとして、日本の社会構成と日本人の心意形成を基本的に規制していることをみてきたので、この編では、かかる日本民族が本具する固有の心的傾斜ないし特有の心^{カルチュラル}意^{パターン}型は、当然に過去の歴史の中にも遡及されなければならぬ、換言すれば現行の民俗構造の跡づけから帰納されたところは、歴史の稜線になんらかの形でその露頭をみせているはずであって、それを簡単に眺めるのがこの編の目的であると説明する。

しかしながら地下に遍在する鉱床も、これを覆うている地表の形貌に直接間接強力な規制をうけているように、時代と階層を貫いて遍在したと想定される祖先崇拜も、祖先崇拜の座ともいふべき「家」——あるいは家的なものないしは同族的なもの——は、超時代的な性格をもちながらも、歴史の基本動向に沿って、時代ごとにそれぞれ特殊な表われ方をしているわけで、従ってこの編では祖先崇拜と不可分な関係にあるものとしての広義の「家」が、およそ如何なるものであったかを歴史的に概観することから始められている。すなわち第一章の「家の時代性と超時代性」がそれであって、それは原始時代の「宗族」、古代の郷戸・房戸、中世武士団の総領制、近世村落の高持本百

祖先崇拜

姓、近代における家の成文化および家制財閥の五節からなっている。第二章の「古典神話の基調」において明らかにせんとするところは、記紀の神話の基調が、神霊からの系譜関係を祖先神話の形において述べようとするところにあること、そしてそれは、古代国家における皇室の支配や権威を、古代的論理に沿って——すなわち神話的に——正当化するために、皇室者流の手で整理せられたものではあるが、しかしながら神話がこのような形をとり、またそれ以外の形をとり得なかつたのは、民族的心意が祖先崇拜を基盤としていたことの反映であると思なければならぬとしている。第三章は、上記のような古典神話が、今日われわれが見るに近い形に整えられたのは六、七世紀のこと、それは大陸の仏教が始めてわが国に移植されて最初の根をおろしかける時であったが、その根は奈良朝平安朝と時代の下るにつれてますます太っていくとともに、また一定の選択や淘汰や変容が行われたわけである。そして一般にそうした選択や淘汰や変容の仕方に、逆に民族的心意の特質が示されるともいうことができるわけで、わが国の仏教受容の仕方もまたその例外ではないといわざるを得ない。すなわち仏教の受容が直接間接に祖先崇拜と結びついて行われたということは、極めて特徴的なことであって、これが第三章の「初期仏教受容」の鮮明するところ、この章は七世父母への追善、山岳仏教、の二節からなっている。第四章の「氏寺」とは、家または同族と寺院の結びついた寺院形態であるが、必ずしも厳格に氏寺とは規定し得ないまでも、氏寺的存在や氏寺の性格は、時代をこえて常に

歴史の表裏に隠顕して日本仏教の基底をなしているものであって、それと上代氏族、王朝貴族、中世武士階級との関係を述べたのがこの章である。第五章の官座と寺座は、その副題に「氏神の産土神化・氏寺の檀那寺化」とあるによって明らかかなように、中世の武士団は氏神信仰を中心として所在の莊園にその団結を保ったが、その氏神の由緒は多様であるとしても、とにかくそれは産土神としてよりも氏神として祭ることの要請が、彼等の同族团的性格そのものにあつたと同時に、また日本人の「祖先」なるものもつ性格、すなわち祖先が他の神格にも容易に転化し得る性格をもっていることにも由来している。かくて彼等は自己の莊園内に自家の社寺をもち、その神威を背景として政治を行なつたが、中世末朝の社会的な大變動にあつて、武士団の崩解とともに莊園制も解体して、中小名主層や隸屬農民層の抬頭にともない、村落協同態や郷村制が成立し、従来の武士団の氏神が地縁協同体の産土神・鎮守神へと質的に転化することとなつた。そしてまたここに武士の氏神を郷村の産土神とそれをめぐる官座へ、武士の氏寺を、郷村の構成戸を檀家とする檀那寺へ、およびそれをめぐる寺座へと改編する契機があつたのである。第六章は「徳川時代の檀家制度」で、ここでは、徳川幕府がキリシタン禁教のために宗門改めを行い、すべての庶民をいづれかの寺の檀家とし、寺に檀家が確実にキリシタンでないことを保証させる義務と権限とをあたえたいわゆる寺請制度によって、社会の隅々にまで寺と檀家との関係を制度的に確立せしめたが、これが庶民の祖先崇拜と仏教とを濃

密に結合させ、また普及させる上に決定的な役割を演じたことを述べており、この章は、寺請制と寺檀制、仏式祖先祭祀の普及、寺請制の基盤、近世檀那寺の系譜の四節からなっている。第七章の「祖先崇拜の近代的形態」は、民法と祖先崇拜、家制国家の觀念像、仏教教団の近代化と檀家制の三節からなっており、これらの項目によつても知られる如く、上に見てきたような同族結合や「家」は、明治以後の近代化するなわち資本主義社会經濟の進展にともなつて、前者は解体し後者は細分化の運命に逢着した。しかしその反面、天皇制絶対主義国家の理念によつて、その絶対王制は「家」や同族結合の拡大再生産されたものとして理念づけられ、一応は信教の自由が認められながらも、「家」や祖先崇拜を否定するならば、国家の安寧秩序を乱すものとして禁圧せられる結果となつたことを説明している。以上によつてわれわれの祖先崇拜が、原始時代の宗族や古代の郷戸房戸より以来、近代資本主義の社会にいたるまで、幾多の変転やモディフィケーションをうけながらも、脈々として根深く遺伝継承されてきたものであることを歴史的に明らかにしている。

後編の「仏教思想の日本化と祖先崇拜」は、祖先崇拜との關係から見た仏教の根本思想、日本常民仏教の教理、大乘仏教の空觀と日本の祖先崇拜の三章に分たれ、第一章は四節に、第二章は五節からなっている。そして第一章においてはその章名の示すように、祖先崇拜は基盤的には祖靈信仰の基盤の上に成立するものであるところから、これが仏教と結びつく場合に、問題の

中心となるべき人間・生死・靈魂といった問題が、仏教本来の立場ではどのように考えられ、またその根本体系の上ではどのように位置づけられているかを明らかにしており、第二章においては素朴な日本の常民が、その固有信仰を踏まえながら、深遠かつ体系的な大乘仏教の教理を、如何に味解して自己の血肉として消化していったかを明らかにしている。たとえば日本民族の固有思想では死は最大の忌穢とされていたが、仏教の受容によって、それは最尊最勝のホトケとして倒錯して浄化されるようになった。もちろんこれはその一例にすぎないけれども、このような倒錯や変容を可能ならしめたものは、日本の常民が、仏教の教理を彼等なりの仕方で積極的に解しとった一面があるとともに、他面、仏教の教理の側にもこのような解釈や変容を妨げない一般的な基礎条件のあったことを認めなければならぬ。その点を明らかにせんとしたのが第三章の「大乘仏教の空觀と日本の祖先崇拜」であつて、ここで著者は、仏教は本来祖靈・祖先神・家その他、祖先崇拜などの如何なる契機とも無縁、ないしむしろそれに反撥的でさえあるべきもののように思われるが、かかる仏教と祖先崇拜とをいみじくも習合せしめたのは、仏教が相対的な現象界を絶対的に否定すると同時に、またそれをそのまま絶対的に肯定する「空」の論理、すなわち大乘仏教の特殊な絶対性と、日本の家の先祖が、ただ尊崇さるべきものであることを、その成立のために必要かつ十分な条件としている一種特殊な無限定性との偶然の合致によつて、ただ日本においてのみ、祖先崇拜と仏教とが習合することができた原因

であると述べている。

以上私は、本書における著者のことばを点綴して、本書の紹介を試みたつもりであるが、私自身の理解の不十分や、言足りず辞もまたつくさずで、著者のいわんとするところを正しく伝えていない憾みが多々あるであろうと思う。しかし以上の粗雑な紹介を通して窺い知り得られる如く、著者が祖先崇拜の問題に限定し、着実な実証的な資料に即して、これをわれわれの「家」の構造と関連させ、まず現実の問題としてこれを浮き彫りにしてわれわれの前に提起し、その動かしがたく否定しがたい現実の習俗や遺俗を踏んまえて、これをわれわれの原始太古の時代から、極めて最近にいたるまでの祖先崇拜の諸態様を、要領のよい簡潔な筆致でもって叙述し、そしてその間われわれの祖先崇拜が、最も大きく影響をうけ、またとにもかくにもその存続を今日にまで保証したものが仏教との習合によるものであるところから、最後に仏教の日本化と祖先崇拜の問題に論及している。そして以上が、本書の主潮であり骨核であると思われるが、まことに著者のいう如く、この祖先崇拜の問題は、われわれの過去の歴史についてはいうまでもなく、現になおわれわれの生活や思想の随所にその露頭を見せている問題であるにかかわらず、これまで正面きつてこれを直接の研究対象するものが余りなかったわけである。そしてそれには種々の理由があるであろうが、われわれの問題意識の貧困さと、研究対象が思ひのほか複雑であるという問題処理上の困難さと、さらにはかかる研究は必然的に日本の国体にメスをいれざる得ないこと

となるが、そうしたことがわが国の敗戦まで、嚴重なタブーとして許されていなかったことなどに由来するといふべきであらうと思われる。そしてこの書はそうした意味で、私の寡聞のおよぶかぎり、かかる研究の先鞭をつけたものであるのみならず、僅々二五〇頁にみたない小冊子でありながら、まさしくその本格的な研究であるといつても過賞ではないと思われる。殊に著者の武器とせられる民俗学的な考察と手法とは、随所にその面目を發揮して、本書に一段の精彩をあたえているのみならず、首尾きわめてよく整備しかつ一貫した本書の結構と、よく推敲せられた簡潔な表現と、着実な論理の進め方とは、読むものをして感銘せしめねばおかないものがあると思う。

しかしもし読後の感を率直にいうことが許されるならば、随所に理解にやや困難な用語が見出されるように思われる。もつともそれらの中には、私が民俗学に門外漢であることにもよるであろうが、また必ずしもそのことの故にではなく、著者が適切な表現や用語に苦しんで、やむなく創作せられたものもすくなくあるように思われる。しかしそれらのことばも、その用いられている場所に関するかぎり、理解不能というわけでは決してないが、それらの用語を単独にとりあげてみると、やはり理解に困難なものがすくなくあるように思う。そしてそれは、あるいは私の無知を露呈する結果となるかも知れないが、気付いた若干を例示してみることとする。(ことばの下の括弧内の数字は、本書の頁数と行数とを示す。例えば(54—10)とあるは、五四頁の十行目である)

範型的(54—10)、祭団(62—2, 72)、開結(62—5, 198—2)、
依代(67—6, 99—4)、神実(70—2)、始源頭(86—2)、
確伝(87—8)、恰合する(88—1)、性相(88—8)、
形名(89—7)、しばしば他村と散り懸りになって(95—14)、
対格(98—2)、物実(99—4)、内実(100—2)、
精淨化(101—6)、常緑梢(104—8)、母郷(204—3)、
祖型(219—9)。

またきわめて頻繁に用いられている「常民」ということばなども、一部特権階級や支配階級の人々に対する世の常の一般庶民を指称することばとして、民俗学ではすでに常套的な述語として用語せられているものではあるけれども、あまり洗練せられたことばではないように思われる。およそ学術的な用語は、適確にその概念を表出するものであると同時に、また読者や聴くものに正確かつ容易に理解されるものであるべきではないであろう。そしてわれわれはおたがいに、そうした意味での責任のない手でもあるわけである。

(サーラ叢書八 平楽寺書店発行 定価三五〇円)